

# 灰だらけ姫

またの名「ガラスの上ぐつ」

ペロー Perrault

青空文庫



むかしむかし、あるところに、なに不自由なく、くらしている紳士しんしがありました。ところが、その二どめにもらったおくさんというのは、それはそれは、ふたりとない、こうまんでわがままな、いばりやでした。まえのご主人とのなかに、ふたりもこどもがあつて、つれ子をしておよめに来たのですが、そのむすめたちというのが、やはり、なにかから、なにまでおかあさんにそっくりないけないわがままむすめでした。

さて、この紳士しんしには、まえのおくさんから生まれた、もうひと

りの若いむすめがありました、それは氣だてなら、心がけなら、とてもいいひとだった<sup>な</sup>亡くなつた母親そっくりで、このうえないすなおな、やさしい子でした。

<sup>けっこん</sup>結婚の儀式<sup>ぎしき</sup>がすむとまもなく、こんどのおかあさんは、さつ

そくいじわるの本<sup>ほん</sup>性<sup>しょう</sup>をさらけ出しました。このおかあさんに

とつては、腹ちがいのむすめが、心がけがよくて、そのため、よ  
けいじぶんの生んだこもたちのあらの見えるのが、なによりも  
がまんでできないことでした。そこで、ままむすめを<sup>だいどころ</sup>台所にさ

げて、女中のするしごとに追いつかいました。お皿を洗つたり、  
おせんごしらえをしたり、おくさまのおへやのそうじから、おじ  
ようさまたちのお居間のそうじまで、させられました。そうして、

じぶんは、うちのてっぺんの、屋根うらの、くもの巣だらけなす  
みで、わらのねどこに、犬のようにまるくなって眠らなければな  
りませんでした。そのくせ、ふたりのきょうだいたちは、うつく  
しいモザイクでゆかをしきつめた、あたたかい、きれいなおへや  
の中で、りっぱなかぎりのついたねだいに眠って、そこには、頭  
から足のつまさきまでうつる、大きなすがたみもありました。

かわいそうなむすめは、なにもかもじつところ覚えていました。  
父親は、すっかり母親にまるめられていて、いっしょになって、  
こごとをいうばかりでしたから、むすめはなにも話しませんでし  
た。それで、いつかつたしごとをすませると、いつも、かまど  
の前にかがんで、消<sup>けしずみ</sup>炭や灰の中にうずくまっていますから、

ままむすめの姉と妹は、からかい半分、サンドリヨン（シンデレラ）というあだ名をつけました。これは灰のかたまりとか、消炭とかいうことで、つまり、それは、「灰だらけ娘」とでもいうことになりました。

それにしても、サンドリヨンは、どんなに、きたない身なりはしていても、美しく着かぎったふたりのきょうだいたちにくらべては、百そうばいもきれいでしたし、まして心のうつくしきは、くらべものになりませんでした。

さてあるとき、その国の王様の王子が、さかなぶとう会をもよおして、おおぜい身分のいい人たちを、ダンスにおまねきになったことがあります。サンドリヨンのふたりのきょうだいも、はばのきくおとうさんのむすめたちでしたから、やはり、ぶとう会におまねきをうけていました。

ふたりは、おまねきをうけてから、それはおかしいように、のぼせあがって、上着うわぎよ、がいとうよ、ずきんよと、まい日えりこのみに、うき身をやつしております。おかげで、サンドリヨンには、新しいやつかいしごとがひとつふえました。なぜというに、きょうだいたちの着物に火のしをかけたリ、袖そでぐち口にかざりぬいたりするのは、みんなサンドリヨンのしごとだったからです。

ふたりは朝から晩まで、おめかしの話ばかりしていました。

「わたしは、イギリスかぎりのついた、赤いビロードの着物にしようとおもうのよ。」と、姉はいいました。

「じゃあ、わたしは、いつものスカートにしておくわ。けれど、そのかわり、金の花もようのマントを着るわ。そうして、ダイヤモンドの帯おびをするわ。あれは世間せけんにめったにない品物なんだもの。」

ふたりは、そのじぶん、上手じょうずでひょうばんの美容師びようしをよんで、頭のかざりから足のくつ先まで、一分ぶのすきもなしに、すっかり、流りゅうこう行こうのしたくをととのえさせました。

サンドリヨンも、やはりそういうことのそうだんに、いちいち



使われていました。なにしろ、このむすめは、もののよしあしのよく分かる子でしたから、ふたりのために、いっしょうけんめい、くふうしてやって、おまけに、おけしようまで手つだつてやりました。サンドリヨンに髪をあげてもらいながら、ふたりは、

「サンドリヨン、おまえさんも、ぶとう会に行きたいとおもわないかい。」といいました。

「まあ、おねえさまたちは、わたしをからかつていらつしやるのね。わたしのようなのが、どうして行かれるものですか。」

「そうだとも、灰だらけ娘のくせに、ぶとう会なんぞに出かけて行ったら、みんなさぞ笑うだろうよ。」と、ふたりはいいました。

こんなことをいわれて、これがサンドリヨンでなかったら、ふ

たりの髪をひんまげてもやりたいとおもうところでしょうが、このむすめは、それは人のいい子でしたから、あくまでたのまれたとおり、りっぱにおけしようにしあげてやりました。ふたりのきようだいたちは、もう、むやみとうれしくて、ふつかのあいだ、ろくろく物もたべないくらいでした。そのうえ、でぶでぶしたからだを、ほっそりしなやかに見せようとおもって、一ダースもレースをからだにまきつけました。そうして、ひまさえあれば、すがたみの前に立っていました。

やがて、待ちに待った、たのしい日になりました。ふたりは庭におりて、出かけるしたくをしていました。サンドリヨンは、そのあとから、じっと見送れるだけ見送っていました。いよいよす

がたが見えなくなつてしまふと、いきなりそこに泣きふしてしまいました。

そのとき、ふと、サンドリヨンの洗せん礼れい式しきに立ち合つた、名づけ親の教き母ょうぼが出て来て、むすめが泣きふしているのを見ると、どうしたのだといつて、たずねました。

「わたし、行きたいのです。——行きたいのです。——」こういにかけて、あとは涙で声がつまつて、口がきけなくなりました。

このサンドリヨンの教母というのは、やはり妖よう女じよでした。それで、

「あなたは、ぶとう会に行きたいのでしょうか。そうじゃないの。」と聞きました。

「ええ。」と、サンドリオンはさげんで、大きなため息をひとつしました。

「よしよし、いい子だからね、あなたも行かれるように、わたしがしてあげるから。」と、妖女はいいました。そうして、サンドリオンの手を引いて、そのへやへつれて行きました。

「裏うらの畠うらへ行つて、かぼちやをひとつ、もぎとつておいで。」

サンドリオンは、さつそく行つて、なかでもいちばんいいかぼちやをよつて、妖女のところへ持つてかえりました。けれども、このかぼちやで、どうして、ぶとう会へ行けるのか、さつぱり考えがつかせませんでした。

かぼちやを受けとると、妖女は、そのしんをのこらずくり抜い

て、皮だけのこしました。それから妖女ようじよは、手に持ったつえで、こつ、こつ、こつと、三どたたくと、かぼちやは、みるみる、金ぬりの、りっぱな馬車にかかりました。

妖女は、それから、だいどころ台所のねずみおとしをのぞきに行きました。するとそこに、はつかねずみが六ぴき、まだぴんぴん生きていました。

妖女は、サンドリヨンにいつけて、ねずみおとしの戸をすこしあげさせますと、ねずみたちが、うれしがって、ちよろ、ちよろ、かけ出すところを、つえでさわりますと、ねずみはすぐと、りっぱな馬にかわって、ねずみ色の馬車馬が六とう、そこにできました。けれども、まだ御ぎよしや者がありませんでした。

「わたし行つて、見て来ましよう。大ねずみが、まだ一ぴきかかっているかもしれないから。それを御者にしてやりましよう。」  
「それがいいわ。行つてごらん。」と、妖女はいいました。

サンドリヨン行つて、ねずみおとしを持って来ましたが、そのなかに、三びき、大ねずみがありました。妖女は三びきのうちで、いちばんひげのりっぱな大ねずみをより出して、つえでさわつて、ふとつた、元氣のいい御者にかえました。それはめつたに見られない、ぴんとした、りっぱな口ひげをはやしていました。それがすむと、妖女ようじよは、サンドリヨンにむかつて、

「もういちど、裏うらのお庭へ行つて、じよろのうしろにかくれているとかげを六びき、見つけていらつしやい。」といいました。

サンドリオンは、いつつけられたとおり、とかげをとってかえりますと、妖女はすぐ、それを六人のべつとうにかえてしまいました。それは、金や銀のぬいはくのある、ぴかぴかの制服せいふくを着て、馬車のうしろの台だいにのりました。そうして、そこに、ぺったりへばりついたなり、押しつくらししていました。そのとき、妖女は、サンドリオンにいました。

「ほら、これでダンスに行くお供ぞろいできましたでしょう。どう、気に入って。」

「ええ、ええ、気に入りましたとも。」と、サンドリオンは、うれしそうにさげびました。「けれどわたし、こんなきたないぼろを、着て行かなければならないでしょうか。」

妖女はそこで、ほんのわずか、つえの先で、サンドリヨンのか  
 らだにさわったとおもうと、みるみる、つぎはぎだらけの着物は、  
 宝<sup>ほうせき</sup>石をちりばめた金と銀の着物にかわってしまいました。それ  
 がすむと、妖女はサンドリヨンに、それはそれは美しいリスの皮  
 の上<sup>うわ</sup>ぐつ（ガラスの上ぐつだともいいます。）を、一そくくれま  
 した。

こうして、のこらずしたくができあがつて、いよいよサンドリ  
 ヨンが馬車にのろうとしたとき、妖<sup>ようじよ</sup>女はあらためて、サンドリ  
 ヨンにむかつて、なにはおいても、夜なか十二時すぎまで、ぶと  
 う会にいてはならないと、きびしくいいわたしました。十二時か  
 ら一分でもおけると、馬車はまたかぼちやになるし、馬は小ね



ずみになるし、御者ぎよしやは大ねずみになるし、べつとうはとかげになるし、着ている着物も、もとのとおりのぼろになるのだから、  
と行ってきかせました。

サンドリヨンは、妖女に、けっして夜なかすぎまで、ぶとう会にはいませんという、かたいやくそくをしました。そうして、もうはち切れそうなうれしさを、おさえることができないようなふうで、馬車にのりました。

## 三

さて、王子は、その晩、たれも知らない、どこぞのりっぱな王

女が、いましがた馬車にのつて、ぶとう会についたという知らせを聞いて、わざわざ迎えに出て来ました。王子は、王女が馬車からおりると、その手をとつて広間の、みんなおおぜい居る中へ案内して来ました。すると、広間の中はたちまち、しんと静まりかえつて、みんなダンスをやめました。バイオリンの音もしなくなりました。それは、このめずらしいお客さまの美しさに、たれもかれも気をとられて、ぼんやりしてしまつたからでした。そのなかで、ただかすかに、こそこそ、ささやく声がして、

「ほう、きれいだなあ。ほう、きれいだなあ。」とばかり、いつていました。

王様も、もうお年はとつておいででしたけれど、そのときは、

おもわずサンドリヨンの顔を、じつとながめずにはいられませんでした。そうして、そつとお妃の耳もとにささやいて、

「こんなきれいな、かわいらしいむすめを見るのは、久しぶりだ。」と、いっておいでになりました。

貴婦人<sup>きふじん</sup>たちは、貴婦人たちで、みんなじろじろと、サンドリヨンの着物から、頭のかざりものをしらべてみて、まあ、まあ、あれだけのりっぱな<sup>ざいりよう</sup>材料と、それをこしらえるりっぱな<sup>しよくに</sup>職人<sup>しやくにん</sup>とさえあれば、あしたにもさつそく、この型<sup>かた</sup>で、じぶんもこしらえさせてみよう、と考えていました。

王子は、サンドリヨンを、そのなかでいちばん名譽<sup>めいよ</sup>の上<sup>じよう</sup>席<sup>せき</sup>へ案内<sup>あんない</sup>して、それからまた、つれ出して、いっしよにダンスを

はじめました。

サンドリオンは、それはそれは、しとやかにおどつたので、みんなは、いよいよびっくりしてしまいました。さて、けっこうなごちそうが、まもなく出ましたが、若い王子は、サンドリオンの顔ばかりながめていて、ひとつものどにはとおりませんでした。

サンドリオンはやがて、じぶんのきょうだいたちのいるところへ出かけて行って、そのそばに腰をかけて、王子からもらったオレンジヤ、レモンを分けてやったりして、それは、いろいろやさしいそぶりをみせました。けれど、ふたりは、それがたれだか分からなかつたものですから、ただもうびっくりして、目ばかりくるくるさせていました。サンドリオンは、こうしてきょうだいた

ちのごきげんをとっているうちに、時計が十二時十五分前を打ちました。するといきなり、サンドリヨンは、ほかのお客たちに、  
ていねいにあいさつをして、ふいと出て行ってしまいました。

## 四

さて、うちへかえると、サンドリヨンは、そこに待っていた妖よ  
女うじよにあつて、たくさんお礼をいったのち、あしたもまた、ぜひ  
ぶとう会へやつてくださいといつてたのみました。それは、王子  
の熱ねっしん心ねっしんなおのぞみであつたからです。

こうして、サンドリヨンが、ぶとう会であつたことを、妖女に

せつせと話をしていますと、やがて、ふたりのきょうだいがかえつて来て、こつ、こつ、戸をたたきました。サンドリオンは、かけて行って、戸をあけてやりました。

「まあ、ずいぶん長く行っていらしたのね。」と、サンドリオンはさげんで、あくびをして、目をこすって、のびをしました。それは、うたたねをしていて、たつた今、目がさめたというようなふうでした。けれど、じつはふたりが出て行ってから、サンドリオンは、まるつきりねたくもねられない気持だったのです。

「おまえさん、ダンスに行ったら、それはたいくつなんぞしなかつたろうよ。なにしろ、あそこへは、まあ、世の中に、こんなきれいな人があるかと思うほど、美しいお姫さまひめが来なすつたのだ

よ。その方が、わたしたちに、いろいろとやさしいことをおっしゃって、ごらん、こんなにレモンドの、オレンジだのをくださったのだよ。」と、きょうだいのひとりがいきました。

サンドリオンは、そんなことには、いつこうむとんじやくなようすでした。もつとも、きょうだいたちに、そのお姫さまの名をたずねましたが、ふたりは、それは知らないといいました。そうして、王子様がそのことで、たいそうむちゆうにおなりになって、その名を、とても知りたがって、みんなにたずねておいでだったという話をしました。そう聞くと、サンドリオンはにつこりして、「まあ、その方、どんなにお美しいでしょうね。ねえさまたち、いらしって、ほんとうによかったのね。わたし、その方見られな

いかしら。まあねえ、ジャボットねえさま、あなたのまい日着ていらつしやる、黄いろい着物を、わたしにかしてくださらないこと。」といいました。

「まあ、あきれた。」と、ジャボットはさけびました。「わたしの着物を、おまえさんのようなきたならしい、灰のかたまりなんか、かしてやられるもんか。ひとをばかにしているよ。」

サンドリヨンは、いずれそんな返事だろうとおもっていました。それで、そのとおりにことわられたのを、かえってありがたいおもっていました。なぜといって、きょうだいが、じょうだんをいったのを真まにうけて、着物をかしてくれたら、どんなになさけなくおもったでしょう。



## 五

さて、そのあくる日も、ふたりのきょうだいは、ぶとう会へ出かけて行きました。サンドリヨンもやはり、こんどは、もっとりっぱに着かぎって、出かけて行きました。王子は、しじゅうサンドリヨンのそばにつきつきりで、ありったけのおせじや、やさしいことをかけていました。それがサンドリヨンには、うるさいどころではありませんでしたから、つかうか、ようじよ妖女にいましめられていたことも忘れていました。それですから、まだまだ時計が十一時だと思ったのに、十二も打ったのでびっくりして、

ついと立ちあがって、めじかのようににはしっこくかけ出しました。王子もすぐあとを追いかけてましたが、とうとう追いつきませんでした。けれど、サンドリヨンも、あわてたまぎれに、金の上ぐつを片足落しました。それを王子は大事にしまっておきました。サンドリヨンは、うちにかえりはかえりましたが、すっかり息を切らしてしまいました。もう馬車も、べつとうもなく、また、いつもの古着のぼろにくるまったなり、ただ片足だけはいてかえった、金の上ぐつを持っていました。

さて、サンドリヨンが出て行ったあとで、王様のお城の番小屋へ、おたずねがありました。

「お姫さまが、ひとり、門を出て行くところを見なかったか。」

ところが、番兵の返事は、

「はい、見たのはただひとり、ひどくみすぼらしいなりをした若いむすめでした。それは貴婦人きふじんどころか、ただのいなかむすめとしか、おもわれないふうをしていました。」というのでした。

さて、ふたりのきょうだいが、ぶとう会からかえつてくると、サンドリヨンは、こういつて聞きました。

「たんとおもしろいことがありますか。きれいなお姫さまは、きょうも来ましたか。」

ふたりがいうには、

「ああ、けれども、その人つたら、十二時を打つといっしよに、あわてて逃げだしたよ。あんまりあわてたものだから、金の上うわぐ

つを、片足落して行つたのさ。その上ぐつの、かわいらしいこと  
といつてはないものだから、王子は、それをしまつておきなさつ  
た。王子はぶとう会でも、しじゅうお姫<sup>ひめ</sup>さまのほうばかり見てい  
らした。きつと、王子は、金の上ぐつをはいているきれいなひ  
とを、すいていらつしやるにちがいないよ。」

## 六

なるほど、ふたりのいったとおりにちがいはありませんでした。  
それから二三日すると、王子はラツパを吹いておふれをまわして、  
その金の上ぐつの、しっくり足にはまるむすめをさがして、お妃

にするといわせました。そうして、王子は、家来<sup>けらい</sup>たちに、その金の上ぐつを持たせて、王女たちから貴族<sup>きぞく</sup>のお姫さまたち、それから御殿じゆう、のこらずの足をためさせてみました、みんなだめでした。

さて、とうとうまわりまわって、金の上ぐつは、いじのわるい、ふたりのきょうだいたちのところにもわって来ましたから、ふたりとも赤くなって、むりに足をつっこもうとしましたが、どうして、どうして、それはみんな、気のどくな、むだな骨おりでした。サンドリヨンは、そのとき、わきで見えていますと、それはなんのこと、じぶんの半分おとしてきた上<sup>うわ</sup>ぐつでしたから、ついわらい出してしまって、

「かしてくださらない。わたしの足にだつてあうかもしれないから。」といいました。

すると、ふたりのきようだいは、ぷつと吹き出して、サンドリヨンをかからかったり、あざけつたり、いじわるく追いだそうとかかりました。けれど、金の上ぐつを持ったお役人は、じつとサンドリヨンの顔を見て、これはめずらしく美しいむすめだとおもいましたから、たとえ、たれでも、ためすだけは、ためしてみなければならぬ、それが王子様のおいっけだといいました。

そこで、サンドリヨンに腰をかけさせて、上ぐつを、その足にはかせますと、それはするりと、ぐあいよくはいつて、まるでうでかためたように、ぴったりくつついてしまいました。ふたり

のきようだいは、そのとき、どんなにびつくりしたでしょう。どうして、それどころか、サンドリオンは、かくしの中から、もう片かたの上ぐつを出して見せました。ちようどそのとき、サンドリオンの教母きようぼの妖女ようじよがすぐあらわれて、杖で、サンドリオンの着物にさわりますと、こんどは、まえよりもまた、いつそう美しい、りっぱな着物にかわりました。

それで、ふたりのきようだいには、あのぶとう会で見た美しいお姫さまひめが、サンドリオンであったことが分かりました。ふたりは、サンドリオンの足もとにつつぶして、これまでひどい目にあわせた罪つみをわびました。サンドリオンは、ふたりの手をとっておこして、やさしくだきしめました。そして、これまでふたりのし

たことは、なんともおもわない。そのかわり、これからは、やさしくしてくるようにといいました。

サンドリヨンは、りっぱな着物を着たまま、王子の前へつれて行かれました。王子は、それで、いよいよサンドリヨンがすきになつて、それから四、五日して、めでたくご婚こんれい礼しきの式をあげました。

サンドリヨンは、顔が美しいように、心のやさしいむすめでしたから、ふたりのきょうだいを、お城へ引きとつてやって、ご婚礼こんれいのその日に、やはり、ふたりの貴族きぞくにめあわせることにしました。



顔とすがたの美しいことは、男にも女にも、とうといたからで  
す。でも、やさしく、しおらしい心こそ、妖女のこの上ないお  
りものだということを知らなくてはなりません。



# 青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は、表題の「灰かぶり姫」に「サンドリヨン」とルビをふっています。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 灰だらけ姫

またの名「ガラスの上ぐつ」

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 ペロー Perrault

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>